西宮神社十日戎開門神事における歴史的変遷

荒川　裕紀

Historical transition of TOKA-EBISU "Open Gate" Ceremony in Nishinomiya Shinto Shrine

ARAKAWA, Hironori

Abstract

TOKA-EBISU "Open Gate" Ceremony, which is Nishinomiya Shinto shrine's annual ceremony held at 6:00AM, January 10th. After grand gate was opened, participants run from grand gate to main shrine (the distance is about 230m). After this competition, Nishinomiya shrine recognizes the persons from the 1st place to the 3rd place as "FUKU-OTOKO (Person with Happiness)". Nowadays, more than 6000 people participate in this ceremony, and this ceremony became the spectacular event in the Kansai area, Japan.

In this thesis, I traced the transition of the form of this ceremony from ancient times to present times. Especially, I researched from the newspaper material and the shrine office diary around late Meiji era to early Showa era (1868-1940A.D.), how this ceremony did change in a social transformation since urbanization in Kansai area. After that, I considered the factor of the transformation of this ceremony and meanings of this transformed ceremony in the society.

Key words: EBISU, FUKU-OTOKO, Shinto, Shrine, Nishinomiya, Hanshin industrial area, modernization, urbanization

1、はじめに

兵庫県西宮市にある西宮神社では毎年１月１０日の午前６時に表大門（通称赤門）が開け放たれ、参加者が本殿に参るという「十日戎開門神事」が行われている。本殿に着いた参加者のうち、西宮神社は１着から３着を「福男」として認定し、神前にて報告したのち特別の祈祷を行う。この神事には２００９年には６０００人を超える人が参加した [1]。在関西のメディアはもとより日本の全国ネット、２００８年にはロイター通信にて当神事が外電されるなど年々報道は拡大している。

当論考では、この祭りの源流を文献資料などから探るとともにどのような歴史事象から現在の形に近づいていったのかについて、特に近現代（明治後期から昭和１５年まで）を中心に当時の新聞史料および社務日誌などからたどってみた。近代の社会変容の中で神事がいかに変化していったのか探るとともに、変化した神事が当時の社会でどのような意味を持つことになったのかに関する考察を行った。

2、先行研究および調査方法

当調査目的における先行研究は、西宮神社前宮司である吉井良隆氏における戎信仰および十日戎に関する論考 [2]や田中宣一氏による全国の戎信仰に関する研究など [3]が挙げられる。西宮神社の十日戎開門神事に限った研究では、拙著の参与観察をして走ったルポや質問紙法による参加者へのアンケートやインタビューを主とした、文化人類学的なアプローチがあるのみである。今回行った新聞資料から歴史的変遷をたどる方法は、拙稿の１つである「十日戎開門神事考」[4]で私が少し行った手法である。今回はそこに主催者側の史料である「西宮神社社務日記」も用いることでより正確な近現代の歴史的変遷が追えることを望んだ。

開門神事にいたる源流と考えられる、十日戎の変遷に関しては吉井良隆氏の論考および西宮神社の史料をもとに流れの整理を行い、近現代の神事の変遷に関しては新聞資料および社務日誌を利用した。新聞史料に関しては大阪朝日新聞および神戸新聞の阪神版・神戸版を主としたマイクロ資料、そして社務日誌は明治から昭和にいたるものを調査対象においた。残念なことに西宮神社では１９４５年６月の西宮空襲によって社務日誌を昭和１６（１９４１）年分から昭和２０（１９４５）年分を焼失しており、その貴重な変遷に関してはこれからも新聞資料のみからの考察となるだろう。また拙論の「十日戎開門神事考」で述べた、太平洋戦争前の「一番福」のご遺族へのインタビュー内容も当論考でも記載している。

3、十日戎の源流

十日戎とは、吉井良隆氏の論考によると十日戎は
松の内の明けた１月９日から１１日までの３日間、主として関西地方以西のえびす社に於て執行せられる。とりわけ社頭の賑わいは、東京の「お酉さん（酉の市）」を凌ぐといわれ、官祭とは違った意味で古くから民間信仰と深く繋がる形態をもって神賑し、斎庭に神人合一の世界

を展開せしめているのである[5]

としている。

柳田国男によると、日本の祭礼が多いのは収穫祭の秋(旧暦１０月)、その次に春の末から夏のかかり（旧暦４月）であるとしている[6]。国の公の祭りの祈年祭を入れて考えても、十日戎の置かれている「１月９日から１１日」というのは年明けという盛大な行事の直後の祭りということで、時期としては異例な祭りである。

なぜこの日となったのかについて、文献史料から考察を行いたい。西宮神社編『西宮神社』には京都粟田口、玄永の経文奥書（建久５年、１１９４年）を取り上げ当時５月９日から１１日までを「西宮参詣日」としていた[7]ようであり、現在での「縁日」であったことがうかがい知れる。

この縁日にどのようなことを行っていたのか、次に挙げる摂津国住吉大社の『住吉太神宮諸神事次第』（鎌倉時代）の中に正月１０日の項がある。そこには

広田御狩。先九日夜。於江比須社御前。酒肴。巫女舞。（中略）十日酉剋。御狩神事。（中略）次江比須御供備進。（中略）次於浜南北山御狩。（中略）浜御狩畢。[8]

とある。もともとは西宮神社（の一部である南宮社）やその北方に位置していた広田神社で行われていた御狩神事が、同じく神功皇后との関係が深い住吉大社（太神宮）で残ったと考えられている[9]。この御狩神事であるが、具体的にはどのようなものであったのか、鎌倉後期から室町期に書かれたと推測される『住吉松葉大記』の中の「住吉社頭年中祭礼神事之次第」[10]には、

恵比須社　西峰見林云・・・・・正月十日于当社行広田御狩神事、巫女為男形持出弓箭狩場之躰也、九日夜結鎭十番有之、觀行此神事則広田五社内別祭浜南宮之子細有之、於西宮者称諏訪明神号浜南宮

とある。

内容としては正月十日に恵比須社で広田御狩神事が行われ、その神事には巫女が男装して弓箭を持ち、全く狩り場におもむく服装をして奉仕したもので、これは神が顕現して狩を行ったことを現しているのであり、あくまでも狩猟行事としての神事の一端を示していると思われる。その後、なぜ狩りの格好をしての神事であるのかについての説明であるが。同じ史料の中で

毎年正月九日、信濃諏訪村民閉門戸止出入、号諏訪社御狩、望山林致狩猟、護猪鹿一則止殺生奉手向西宮南宮、礼奠十今断絶（中略）以上西峰言也[11]

とある。西宮神社の中にある浜南宮社の中の一祭神が諏訪明神であり、そのため「狩」を行うのだと述べられている。

しかし、平地部である西宮では狩りが頻繁に行われたとは考えられず、時期も狩りが行われる時期としては不適当であることから吉井良隆氏は「御狩」ではなく、柳田国男氏の述べる「ミカハリ」ではないかと考えている[12]。

柳田氏が昭和１７年に著した「日本の祭り」[13]の中で、

ミカリ・ミカハリは千葉県の南部、上総の２郡から房州にかけて、旧暦の１１月の下旬に７日から１０日かけて行われるものであり音を立てず、笑ったり、高話したりせず。髪を結わずに機を織らずまた針を執らず、外へ出て働かず外の人を入れず、以前は殊に武士の訪問を嫌ったという[14]

と記しており、その他の地方では「イゴモリ」と呼ぶものの、この地方では「ミカリ」「ミカハ（ワ）リ」と呼んでいるものであるとしている。神様がこの間に山に入って狩りをするので邪魔をしてはならないという説もあるようだが、この点について柳田は本来「身変わり」すなわち、常の俗界の肉身を改めて、清い祭りの人になる準備期間の意味であると述べている。

西宮の十日戎をみた際、これとよく似た祭りは柳田の著書にも出てくる「イゴモリ」である。福神学研究を行った大江時雄氏が作成された、１９９８年度の「えびす新聞」で明治３２年２月１９日発行の毎日新聞の記事の解説をされている。ここで、そのまま抜き出したい。

摂津国武庫郡西宮町に鎮座せる西宮神社祭神は世に恵比須大神と称し、福徳を授けたもう神として古今、衆庶の尊敬厚く、全国いたるところに祭祀して神徳を仰がざるはなし。本日、大祭に相当するに因みてその由来をたずねて読者の一粲に供す。十日戎祭は、古く居籠り祭りといっていたこともある。それは、毎年１月１０日大祭の前夜、居籠りといって氏子の人ら皆、年始に祝って立てた門松を逆さに吊り、門戸を閉じ、菰または莚を垂れて、終夜外に出ず、声や響きを留めて居籠り、翌日未明、各々の戸を開き、争って社参する。世にこれを十日戎と称する。西宮神社本記に「伝に曰く。邪神、この浦に住みて年ごとの睦月９日というには生ける人を生け贄とす。然るより、この日にあたりて、所の人々泣き悲しむこと限り無し。蛭子神、この浦にとどまりたまいて、すなわち、教えて曰く。われ、この邪神を避くべし。然せんにはこの日に当たりて、往来の人々を留め、門を閉め、戸を閉じて人々ひそまりおるべし。また松を伐りて、その門々に逆さに掛ければ、必ず、悪神、恐れて来たるまじ、と。諸人その教えの如くするに、災害を免れたるより、今において、そのこと違えず、西宮居籠り祭といい伝うるなり」。とあって、今もなお９日に門松を逆さに立てる家有り、古くには『重篇応仁記』（室町期）等から散見される。

字が「居籠」となっており、逆さ門松などの西宮独自のものも散見されるが、神事の形態を見てみると日本で数多くの地域でみられる「物忌」の一種であることが分かる。

「御狩」でなく「イゴモリ」とすると、物忌の行われる季節と合致する。柳田氏の物忌に関する主張をまとめると、この精進を守る「物忌」は西国では夏越の時期に行うことが多く、京畿や東国では冬春の境にやることが多いという。

期間は古来、月の４分の１くらいをあてて行うことも多かったと述べているが、時代が経るに連れ近現代に近づくと仕事の関係上籠る期間が２，３日のみとなった地域もあるとしている。[15]

吉井良隆氏もこの柳田の「ミカハリ」論を踏まえて、

厳重な忌籠りによって常人の状態と異なった神に近づく清浄な身体に身かわりをして、翌十日戎に参詣するに適した神人和合の境地をつくり出す精神的諸準備を行う神道的行事なのであって、これを身かわり（ミカワリ）即ちミカリの根本的意義であったと思う。[16]

と結論付けている。

私はこの吉井氏の説に関して、説得性をもって受け入れることができる。気になる点は「ミカリ」という言葉での同様の神事が、前掲の関東地方にしかないことなどがある。

私の考えるこの十日戎の歴史的変遷としては以下である。古来は旧暦の正月、つまり農耕歴での冬から春の中間に行われていた西宮地方の人びとの習慣である「イミ」もしくは「イモヒ」があった。そこに西宮南部の浜で信仰が始まった「蛭児」神の信仰が交じり合うことで、西宮独自の居籠神事と発展した。そこに西宮北部の広田神社の信仰や、一祭神でもあった諏訪明神の「御狩」の字が付けられると同時に狩りの姿での巡行が行われていった。その後、鎌倉・室町期の傀儡子らによる宣伝もあり、漁業神の色合いが強かった「蛭児」神が農業・商業までも包括する「福神・戎神」としてその性格を変化させていく中で多くの庶民の信仰を集め関西地方の一行事として定着していったと考える。

吉井良隆氏は「福神、商売神として多くの尊崇を集め民衆の生活に融合していったのが江戸時代であった。」とし、「正月の年中行事も終わった直後、ここに改めて一年の招福を祈願することが最も適した日取り」[17]だったと述べている。一大商業圏として発展していった時期に、この神事がイベントとして利用されたということも考えられる。

特にこの賑わいが顕著だったのは、大阪の南郊に西宮神社の戎神を勧請して成立した今宮神社である。商都大坂を控えた地理的環境によって、本社である西宮神社をも凌ぐ殷賑さを示した。『摂陽群談』の今宮村蛭児社の条には「毎歳正月十日に貴賤群ヲ成シ商家ノ輩福徳ヲ祈リ世俗十日恵比須ト号祭ルノ処ナリ」[18]と記されており、当時の隆盛が感じられる。

本社の西宮神社でも、神事本来の意味が変質していることが分かる。例えば文化１４（１８１７）年の西宮神社の社務日誌では「一月九日忌籠、産子中、門戸背戸に筵をたれ、松をさかさまにつり候、古来より仕来りに候、古例の通相慎みこの夜社中諸灯明無之候、暮六つ限りに往来参詣等相止め門戸背戸閉ざし、時の太鼓、鐘等も六つより六つ迄（午後六時から午前六時まで）相止め厳しく相慎み候事云々、」と書かれており、人びとや神職が「居籠」をしている様子が表れている。しかし『摂津名所図会』の中では十日戎については以下のように述べられている。

毎歳正月十日は居籠祭りとて九日の夜には此御神広田社へ臨幸ましまし、神像の悪きにより人目をはづかはしくおもひ給ふ諺ありて、市中の民家ことごとく門戸をかたく閉莚簾など垂て門松を逆に立たり、門には遠近の親きやから知己の者多く来りて酒のみ（中略）、一夜禁足して物静に神祭をつとむ、早鶏鳴の頃より近隣の参詣あれば、社頭も賑しくなりて市中も門戸を開きみなみな本社へ詣す、社辺にはいろいろの物売市をなし放下師観物物芝居などありて群集する事稲麻の如し、これを十日蛭子という。[19]

なぜ、前日の晩に家の戸を閉めて「精進」しなければならないのかという説明では、戎神の姿が醜いためなどと書かれている。ここから、以前の「籠る」意味が変化しているのが分かる。３日間の日程によって大祭を迎えるという形はかろうじて残ってはいるものの、「籠りを行って、神人和合の状態にして大祭を迎える」という根本的なところまで語られない時代が来たことが感じられる。信仰の形態および戎神に人びとが求めるものが変化していったことが、江戸期になって如実に表れている。

4、近代の変容

明治維新は西宮にも大きな変革をもたらした。例えば国家神道成立の過程では、近隣の広田社は神功皇后との由緒から官幣大社となり、西宮神社は県社へと位置づけられた。そしてもう１つ日本での年中行事において大きなことといえば、明治６（１８７３）年の太陽暦の採用である。

公共機関などは採用と同時に変化していったが、神事・祭事に関しては旧暦で行う地方がほとんどであった。しかし都市部では、そこで生活する人びとの生活歴が新暦に変化したこともあり祭礼も新暦で行うことが多くなった。

明治１６（１８８３）年の１月１０日（新暦）の大阪朝日新聞を見てみると

昨日今日は例の十日戎にて難波警察署にて例の如く巡査甲乙両部共惣出戎橋南詰より人力車の通行を止め今宮迄の道路参詣下向の両道と立て５､6 間おきに巡査を１名ずつ立番厚く往来人を保護

とある。１０年で、大阪では新暦の祭事が根付いていることが分かる。明治２４年の１月１０日の大阪朝日新聞では「昨日は宵戎今日は十日戎に付日和さえ宜ければ例年の通り雑踏を極る事必定につき」とあり、臨時の警官の出張所を南新地の歌舞練場に設けたり、阪堺電車の駅近くに設けたりと非常な賑わいを持っていることがうかがい知れる。

明治２６年１月１１日の大阪朝日新聞の記事でも同様のことがかかれており、スリに気をつけるよう巡査や特務巡査まで動員している様子や、同じく戎神も祀る京都の建仁寺町の蛭子神社のことも取り上げている。

京都建仁寺町の蛭子神社は当地（大阪）今宮ほどには繁盛せずほい駕籠などの事もなけれど一昨日昨日は参詣人群集して相応に賑わひ其影響にて同社の裏通りなる宮川町は大繁盛

とある。大阪のみならず、京都の新暦での十日戎の報道がなされる中、本社である西宮はどうだったのか。大阪朝日新聞、および大阪朝日新聞神戸附録、などの新聞資料では

明治の１０年代では残念ながら記録を見つけられなかった。

しかし明治２６年の２月２６日の大阪朝日新聞の中には以下のような記事があった

本日は旧暦の正月十日なれば西の宮の戎神社へ参詣するもの多きにつき本日梅田神戸間臨汽車を出すことに為し（中略）又昨日より府下の宝恵立商人、のぞき、からくり、其他の見世物、古手商人等は続々店出に出張したり随分賑わふことならん

つまり、新暦での十日戎は都市部である大阪、京都、神戸（柳原）[20]の神社で行われ、旧暦の十日戎は西宮神社で行われるという棲み分けがなされていたことが確認された。

しかしこの「新暦十日戎は大阪、京都そして神戸、旧暦の十日戎は西宮」との原則は明治３８年の阪神電車の開通によって変化してしまう。特に阪神電車の敷設方針としては旧来から存在する阪神間の街ごとに電車（電気軌道）を通す方針であったため、中世以来阪神間でも有数の門前町であった、西宮神社近辺には戎停留所（現在の阪神本線西宮駅）が設置されることとなり、大阪および神戸の人びとの参詣を容易にした。

そのことは、明治４１年1月１１日の大阪朝日新聞神戸附録の中で書かれている。

西宮の十日戎は阪神電車の開通後毎年新旧両度に祭典を行うこととなり旧暦十日戎ほどの人出はあらざるも昨日は天気好く風はなし阪神其の他近郷よりの参詣人多く宵戎に２倍３倍の人出にて電車も終日客を満載し西宮署は総出にて雑踏を取り締まり沿道の警察署にても各停留所に１名又は２名の巡査を派出して雑踏を制して居たるが午後３時頃迄は差したる事故もなかりし由しにて境内道筋は更なり市中は一般に賑わいたり

ここから、新暦の戎も賑わっていることがうかがえる。

同年の２月１２日の大阪朝日新聞神戸附録では

官鉄の新駅「えびす」は（阪神）電鉄に対する大人気なき競争の結果なるも兎に角今年の蛭子祭は之が為一層の利便を得て一段参詣客を多からしめ京阪神は云うに及ばず東は滋賀、岐阜、愛知、西は播丹各地及び岡山あたり尚大阪商船の臨時便による阿波、淡路よりの参詣客も少なからず中には９日より泊込みて午前１時の開門と共に我第一の福を授からんと押し掛くるもありて10日（９日の誤りか）の宵戎は近来稀有の雑踏を極め雪崩をついて門内へくづれ込む人並みのすさまじさ（中略）午前４時過ぎ式事全く終りて門を開けば篝火華かなる祠前は忽ち人に埋められて一時は身動きもならぬ有様。

と旧暦の十日戎が活況を呈していることと述べており、それと同時に官鉄（現ＪＲ）が阪神と対抗すべく新駅を作って集客に乗り出すなど、その後の阪急電鉄（神戸線開通が大正１０（１９２０）年）も含めた阪神間での乗客獲得競争を暗示するものとなっている。

この記事で１番注目したいのは、「午前１時の開門とともに」の段である。室町期より戎信仰の中心となっていった「福」を真っ先に駆け込んで得ようとすること。また多くの人が、夜明け前から門前に並び、早朝から境内に溢れるほどの参詣客がいるという非日常性が感じられる。そしてもう１つは「門」の役割が加わってきたことである。「開門神事」とも大いに関連する表大門（赤門）は安土桃山期から江戸初期に豊臣秀頼からの寄進と伝えられるものであり、江戸期の十日戎ではもちろん開門、閉門の役割を担ってきたわけだが事務的に開門をすることが求められる社務日誌を除いて、これまでの新聞紙上ではあまり書かれているものがない。居籠の後に市中の家々の各戸が開け放たれたとの記載がなされているものは多いが、門が新聞紙上で注目をされ始めたということに留意したい。考察部分でこの門の持つ神事での役割についても触れたい。

5、阪神間の十日戎として

前項で示した明治４１年（１９０８）年の大阪朝日新聞神戸附録では「西宮の十日戎は阪神電車の開通後毎年新旧両度の祭典を行う事となり」とあり、そして「旧暦十日戎ほどの人出はあらざるも昨日は天気好く風はなし阪神其の他近郷より参詣人多く」とあった。そして明治４２（１９０９）年1月１１日の大阪朝日新聞神戸附録では「西宮の十日戎は陰暦を主祭とする」とある。西宮神社禰宜、吉井良英氏に聞いたところ、現在でも新暦、旧暦とも神事として行っているが、新旧とも一般参詣のあった十日戎としては昭和２０（１９４５）年までであったとのことである。

ここから考えられる仮説としては「西宮の大阪・神戸における郊外化が進むにつれ新暦での年中行事が身についてしまった人たちが増え、参詣者数や祭事を行う人員の数、実質的な意味での主祭と副祭が逆転したのではないか」ということである。その上で史料を見ていきたい。

新聞資料と神社側の史料を見比べながら、新暦と旧暦の十日戎に関する主祭・副祭の逆転がどこで行われたのかということも考えた。まず新聞紙上においては、明治４５（１９１１）年1月９日の大阪朝日新聞神戸附録では

９，１０，１１の３日間執行する西宮の十日戎は毎年新旧両度宛行ひ来りしを旧暦廃止後は１月１０日を初祭、２月１０日を本戎又２０日を二十日戎と称へて同じ祭典を３度も繰り返すことになりし為一般参詣者は何時でも福徳は授かると思うようになり

とあるが、これはどうも間違った解釈に思われる。なぜなら、その後の大正１４（１９２４）年2月３日の同じ大阪朝日新聞神戸附録の記事に

（大正１４年２月）２日は旧暦十日戎に相当するので西宮の戎さんは新暦の十日戎にお参りの出来なんだものや田舎の人達の参詣で１日の宵戎から相当に賑わった３日は節分でもあり残り福なので一層人出が多かろう

とでているからである。しかし、記事の扱いも小さく、その他の年度でも新暦の記事の書かれ方、記事の大きさを比べても相対的にみてこの大正年間に参詣者から見る新暦と

旧暦の立場が逆転したことがうかがえる。新聞紙上では旧暦の方の参詣者数が書かれていないので一概に比較はできないが、この大正１４年の新暦の十日戎は「小雨があったため」少なかったとはいえ、３日あわせて１９万人が参詣に来ている（「警察方面」の集計）。阪神電車は「今十日の本戎に全線の急行を廃し各停留場停車の二両連絡を運転する筈」とあり、当時としては画期的な対応をしていたことが分かる。天気や祭神の性格上、景気によって人出の多い少ないがあるのは、現在の十日戎でも同じである。そして「恵方」によっても大阪方面から参詣客がやってくる年と神戸方面からやってくる年というようなことが起きていたことが、昭和に入っても記事から散見される。

新聞紙上からは、明治４０年代から大正年間にかけて阪神間での阪神電車、鉄道（国鉄）、および阪急による輸送手段が確立していったことが分かる。そのために、それまでの西宮を中心とする祭礼から、阪神間全体での祭礼へと変化していったと考えられる。

明治４０年社務日誌によると、阪神電鉄（社務日誌には電鉄会社と記載されている）による特別な祭典が、新暦の十日戎にてされていることや、明治４０年が大阪からの恵方にあたっていた事もあって戎停留所に２棟の待合所を新設したことを皮切りに、数十におよぶ参道へ電灯の設置、美観を供えたガス灯６基の設置を行っていることが分かる。

新旧の祭を比べるにあたって、大正年間を過ぎた昭和２（１９２７）年の社務日誌の中での新旧の十日戎の比較を行った。参拝者の実数は旧暦の側ではカウントしておらず、新暦の十日戎に関しては、阪神電車の西宮・西宮東口の乗降者数合わせて３日で９５４３５人（西宮８２７８７人、西宮東口１２６６８人）ということが分かっている。そして神社の授与した御影などの数量を記載した部分があった。それを表にまとめたものが表１と表２である。

両神掛	一神掛	小金	大金	開運	木札	船玉	箱札	大国	御影	品目	表１・昭和２年新暦十日戎
二〇	三〇	一〇〇〇	五〇〇	一一〇〇〇	一〇〇〇	五〇〇	六〇〇〇	一〇〇〇〇	四〇〇〇〇	出高	
十五	二九	四一七	一九五	一二五〇	一〇五	四五〇	九一九	六一〇〇	一一七四〇	残高	
五	一	五三八	三〇五	九七五〇	八九五	五〇	五〇八一	三九〇〇	二八二六〇	差引	

両神掛	一神掛	小金	大金	開運	木札	船玉	箱札	大国	御影	品目	表２・昭和２年旧暦十日戎
二〇	二〇	一〇〇	四五	一〇〇〇	九〇	五〇〇	一〇〇〇	三五〇〇	一〇〇〇〇	出高	
一六	一四	二四	二四	六六	二〇	三二一	六九	二一九二	三八五二	残高	
四	六	七六	二一	九三四	七〇	一七九	九三一	三一八	八一四八	差引	

出高は、実際に社務所内の授与所にて準備した数で、残高は残った数、実際に授与されたのが差引の項の所となる。例えば、どちらの祭礼でも一番授与されている御影（戎様の神像が描かれたもの）の数量に着目していくと、景気・恵方・休日（この年の旧暦の十日戎は２月１１日で紀元節である）そして天候などの要因があるために一概にはいえないが、新暦の十日戎が旧暦の約４倍の規模にまでなっていることが、ここから考えられる。

この後の昭和１０年代になると、社務日誌では阪神電鉄、阪神電鉄の国道線、そして阪急電鉄の乗降者数の詳細なデータが毎年記載されることとなる。(表３)

表３　新暦十日戎時の各電鉄の利用者数

	昭和１１	昭和１２	昭和１３	昭和14
阪神	159,600	225,600	232,000	289,400
阪国	50,400	53,700	52,800	60,300
阪急	17,156	12,955	調査せず	記載なし

各セルの数値は乗降者数の３日間の合計。阪神は阪神電車本線のこと。そして乗降者数は戎（西宮）、西宮東口駅の合計。阪国は阪神電鉄国道線のこと。乗降者数は戎停留所と札場筋停留所の合計。阪急は阪急電鉄のことで、当時この期間だけ西宮北口駅と夙川駅との間に「西宮戎臨時駅」を設けており、その乗降者数である。阪急電車の１３，１４年度そして国鉄の乗降者数が不明なのが悔やまれるが、圧倒的に阪神電鉄（国道線は阪神国道、現在の国道２号線を運行していた路面電車）が、この祭の参詣客を運んでいたことが分かる。

ここで明治維新以降の西宮を中心とした阪神間での出来事を年表の中で追ってみたい。[21]

１８７４年…官営鉄道東海道線開通。西宮駅設置。

１８９５年…英国人グルームが六甲山を開く。

１９００年…村上龍平、御影町に土地取得。財界人の転入が阪神間で始まる。

１９０５年…阪神電鉄の営業開始、阿部元太郎、住吉で住

宅開発。阪神芦屋駅を中心に阪神間の財界人の邸宅が建ち始める。
１９０７年…香野蔵治と枦山慶次郎によって香枦園が開園。鳴尾に関西競馬倶楽部開設。阪神電鉄は香枦園浜海水浴場、芦屋遊園地を開設。
１９０８年…阪神電鉄『市外居住のすすめ』発行
１９０９年…阪神電鉄が西宮駅付近に貸家３０戸を建築、箕面有馬電気鉄道『如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋を選ぶべきか』を発行。
１９１０年…箕面有馬電気鉄道、池田室町にて住宅の月賦販売開始。阪神電鉄、鳴尾村に文化住宅建築。
１９１１年…中村伊三郎、苦楽園に温泉リゾート建設。阪神電鉄、御影に分譲住宅建設。阪急電鉄、宝塚新温泉パラダイス営業開始。財界人子弟向けの私立の教育施設の整備がはじまる。
１９１４年…芦屋郵便局にて電話交換業務開始。阪神電鉄『郊外生活』発行。鳴尾ゴルフ倶楽部開設。
１９１７年…大神中央土地株式会社、香枦園の土地を買収して高級住宅地化。
１９１８年…甲陽土地会社、甲陽園を開発。
１９１９年…都市計画法、市街地建築物法の公布。宝塚音楽学校設立。
１９２０年…阪急神戸線開通。
１９２１年…阪急電鉄岡本で住宅地開発。阪急西宝線開通。灘神戸生協設立。
１９２２年…阪神電鉄甲子園を開発。
１９２３年…阪急電鉄、甲東園で住宅開発。
１９２４年…阪急電鉄、仁川で住宅地開発。阪急甲陽園線開通。国鉄芦屋駅北側に芦屋文化村建設。
１９２５年…甲子園海水浴場開設
１９２６年…宝塚ホテル開業、阪急今津南線開通
１９２７年…阪神国道開通、阪神国道電車開通
１９２８年…阪神電鉄、甲子園で住宅開発
１９２９年…株式会社六麓荘設立、関西学院甲東園に移転
１９３０年…阪急電鉄、西宮北口で住宅地開発、梅田に阪急百貨店開業。甲子園ホテル開業。
１９３４年…西宮今津健康住宅地開発、神戸女学院岡田山に移転、甲南病院開設
１９３７年…阪急電鉄、武庫之荘開発、西宮球場開設。

以上から分かるように、明治維新以前は酒造業が盛んであったけれども、一農村地帯として考えても差し支えなかった西宮が、交通機関の発達とともに大阪と神戸の住宅地そして文化の発信地として開発されてきたことがみてとれる。同時に昭和期に入ってから、日本の第二次産業革命を牽引する阪神工業地帯ができ、その中で西宮という町が市となり、人口流入が激しくなっていった。電鉄が乱立した結果、利便性が増し、外部からの移入者がたくさん集まった。その中で自分たちの生活スタイルにあった祭礼として新暦の十日戎が都市で生活するものにとっては、受け入れられやすかったのではないだろうか。

これらの史料や年表から導き出せることは、交通機関（特に阪神電鉄）の発達で、西宮の郊外化・都市化は達成されたということ。それにより新暦にて生活する参詣者が多く集うこととなり、新暦の十日戎は旧暦の祭の規模を逆転させ、主祭副祭の立場を逆転させたという仮説は証明される。新暦の十日戎が、西宮の都市化に伴う「阪神間の創造」の中で新しく生まれた祭礼であると私は結論付けたい。

この様に新暦の祭事が大きく、そして実質的な「主祭」となったのには電鉄会社の経営努力の賜物とも考えられる。しかしなぜ、こう多くの人がこの祭に集ったのか。この辺りは考察のところで、詳しく述べていきたい。次の項目としては、昭和１２年から新聞紙上をにぎわせ、現在まで西宮神社の注目されるべきイベントとなった「新暦の」十日戎の「開門」がいかに生まれることとなったのかについて、新聞記事を提示した上で、その成り立ちについて調べてみたい。

6、新暦による十日戎の発展

新聞資料で見る最も古い新暦の十日戎での「門を開けてさっと本殿まで駆け込む」という記事は、私の持つ史料では大正２年の１月１０日の大阪朝日新聞神戸附録である。そこには以下のような記述がある。

> 例年の如く昨夜８時より９時までの間には境内の参詣人は勿論、出店の者までも残らず追出して深夜の神事を行ひ今暁５時を期して例の「門開け」を為すのであるがこの門明（ママ）に先登第一の魁けをして神殿へ駆けつけ誰よりも先に鈴の紐に執りついたものは偉大の福運を授かるといふので暁寒を冒して門前へ押しよせるものが多い、併し雨が降つてはどうであらうか

とある。「例の」とあるところから、これより以前から常態化していたことが考えられ、その史料を集めることがこれからの課題となるが、現在のところ一番古くに出ているものである。

この文章からいつの頃からか分からないものの、新暦でも十日戎の中で門を開けることが恒例行事となっており、そして一番初めに鈴の紐にたどり着いたものが「偉大な福運」を授かるのだという形となっている。明治４１年２月１２日の大阪朝日新聞神戸附録の中で「中には９日より泊込みて午前１時の開門と共に我第一の福を授からんと押し掛くるもあり」とあったが、それが見事に新暦の十日戎へと引き継がれている。それと同時に新聞紙上において神社の行う居籠りの祭が、旧暦で行っていたものと同じものが行われ、その神事の間には参詣人や出店のものまでが境内から門の外へ出ていることがうかがえる。

ただ、ここから江戸期の居籠り祭のように、西宮神社の氏子中が居籠りに入っているのではない。この頃には神社境内つまり「門の中」でのみ、居籠りを行っており、午前５時の開門によって、その居籠りの状態から解き放たれた

境内を参加者が「福を求め」に駆けるというものに変化していることがここから分かる。

この記事の次の日１月１１日の記事には１０日午前５時の様子が次のように書かれている。

さて昨暁に於ける「門開け」は例年の如くに午前５時を期して行はれ扉をサツと押明ける（ママ）と門前に松脂（てぐすね）引いて待かまへた信心の凝りはドツと一度に込み入つて源平時代に於ける先陣争いもかくやと想はれた。神殿にては先登者に対して夫々優遇を為し神符を与へたれば先登者は欣々然として下向した。これが中々の壮観である。引続き近郷近在をはじめ阪神両地より電車に乗って来る者引きもきらず阪神電車は恵美須、香枦園および東口の各停留所に前夜より電灯を設置したので夜を籠めて来る客も足元険なからず午前９時には街の街道傍に前日来場取りをしていた諸商人はここを先途と声を嗄らして客を呼んだ。

「源平の先陣争いもかくや」というのは、いささか言い過ぎであるが熱気がこちらまで伝わってくる。この記事で注目すべきことは、一番でたどり着いた人物に神社が特別の神符を与えていることである。

このことから、大正初年のあたりまでには新暦の十日戎が行われる中で一番乗りの参詣者は特別な存在との認識が参拝客はもとより、神職にまで広まっていたことが分かる。

その同じ年の２月１６日の同新聞神戸附録をみると旧暦の十日戎が書かれている。

１５日は西宮戎神社の陰暦十日戎にて神社にては１月の十日戎祭りと同様神々しく社殿を飾り境内を掃き清めて参詣客を待構えたれば陰暦墨守の村落の参詣者早朝より続々出掛け午前１０時過ぎよりは上り下りの阪神電車も満員となり、汽車よりする赤毛布に鞄と風呂敷包とを打ち掛けにした遠来の参詣客も亦発着毎に道筋の雑踏を極めこれが為露店、出店等繁盛したり

とある。新暦の扱いに比べて小さく、実質１０行ほどである。そしてつい５年ほど前まで旧暦の十日戎に記載のあった「門が開いて駆け出す」といった記述がない。

取り上げた新聞が大阪朝日新聞という大阪の都市の民衆を読者と考えている新聞であり、神戸附録の方は神戸にいる読者向けの記事であるため、都市部での生活というものに紙面の大半が割かれるということは考えられる。そのため新暦の十日戎では大阪朝日ならば以前「今宮」そして「堀川」（いずれも大阪市内の神社）でのことが大きく取り上げられ、神戸附録でもまず先には「柳原蛭子神社」の記事が出ている。それは、明治から大正になってもさほど変わりはないが、西宮の記事の量はこの辺りを境に圧倒的に新暦の十日戎の方が多くなる。大正２年から時代が下るにつれその量は増大し、昭和期にはほぼ新暦の十日戎のみが報道されることとなる。

前項でこの変化については述べた。「阪神間」の創造によって西宮が都市化し、新暦の時間で生きる住民の参詣が多くなった。祭り自体の規模も旧暦で行われていた本来のものから、新しい神事の方が大きくなり「主祭」と変化していったことの新聞紙上での証明になろう。

そしてもう一点挙げることとすれば、旧暦の十日戎で特にそれだけが目的では行われていなかったものの、参詣者たちが感じていた「門が開かれて参詣道を駆けて一番にたどり着いた者（鈴紐を取った者）に福がある」という考え方が見事に新暦の神事にも踏襲され、恒例の行事となっていったことである。新聞紙上からみると明治晩期から大正初期にこのことが行われていると読み取れる。具体的な過程を読み解くには、もう少しこの年代の史料の収集が必要であろうが、なぜ新暦のイベントで「門開け」という手法や「福が得られる」という考え方が恒例化したのか。この点については前項の問いと併せて考察することとする。

7、一番福の誕生

現在でも使われている語句である「一番福」が見受けられるのは次の年大正３年の大阪朝日新聞神戸附録である。

「１０日の西宮は本戎に一番福を授からんと午前５時の開門を待って参詣者ドツと押し寄せ之に続いて午前８９時頃には境内一面人を以って集まった。」

とある。開門時間は大正２年と同様現在より１時間早い午前５時の開門である。それが大正６年の同新聞の記事（１月１１日）では

祭典は午前４時まだ暗い内に篝火を焚いて執行せられ夫れが終わった６時ごろに東西両門を開いた

となる。６時ちょうどとなるのは大正９年の記事である。大正７年は戦争成金が多く集う記事で埋められ、開門時間が書かれておらず大正８年も見つけることができなかったが、大正９年１月１１日にはこう書かれてある。

今日は即ち本戎で未明から昔ながらの居籠祭と云ふのが行はれ６時開門と同時に一丁余も綱になって押しかけた参拝客が第一の福を授からんものと社前までのマラソン競争いつもの通り幸ひ怪我人のないのが不思議な様なり

多くの人間が参加していることが分かると同時に「マラソン競争」との表現から躍動感までが伝わってくる。

この後収集した新聞群では開門に関しては取り上げられていないが、昭和１０年１月１１日の大阪朝日新聞阪神版に以下のような記事が再び現れる。

午前６時の開門には一番鈴の功名を争う人がぎっしりと詰めかけ開門とともに拝殿へ福争ひの競争

そして昭和１２年１月１１日の大阪朝日新聞阪神版に一番福が個人名で初めて掲載された。写真入りの記事でタイトルは「福を狙ふ凄い人並み」とある。

午前六時、大門が開くのを今やおそしと待ちかねた一番福を狙って大門外にワッショワッショと押し寄せた老若男女が三千人、太鼓の合図とともにドッとばかりになだれこみ、本殿の鈴をめがけて殺到、掃き清めた斎庭に、久保町千足材木店の田中太一さんが、とびこんでからは

瞬く間に境内は参詣群でうまってしまった。（中略）今年の戎サンは一番乗りは誰だらう、一両日前から市民の興味はこの一点に集注されてゐたが、果然西宮市久保町千足材木店の田中太一さんだった。（中略）「勝つた！！一番だ、一番だ」と高らかに勝名乗りをあげる彼氏は２１歳の時に西宮へ来てから本年３７歳まで昨年を除いて１６回、覇権を獲得、めでたきレコードを樹立した　彼氏一番乗りの哲学は粛然たるファインプレーに終始してゐる「欲からではない、達者でお参りできるだけで嬉しい、福は主人に持つて帰るのです、一番に参拝しないとどうも気分がわるくて・・・」

この田中氏は（昭和１３年）年の大阪朝日新聞阪神版の１月１０日の夕刊にも一番福の年数が異なるが、記載がある。

午前六時の開門と同時に数百の参詣人が例によって神前への一番乗りを争ったが二、三、四年続けてゐる西宮市久保町の千足材木店の田中太一さんと、氷上郡春日六村尾松新之助さんの二人が同時にさっと神前の鈴の綱にとびついて結局二人が一番詣りと極つた。

ただ明朝１月１１日の朝刊には

午前６時太鼓を合図に開門すれば、一番福を狙って門前に待機の善男善女三千人がどつとばかりなだれこみ、境内数ヶ所に燃えさかる篝火をたよりに本殿の鈴をめがけて殺到、いつもは閉ざされている唐門もサツと左右に開いて一番乗りを迎へ入れる、１６年間一番乗りの覇権を維持する西宮市久保町千足材木店の田中太一さんと丹波氷上郡春日部村の尾松新之助さんの２人が同時に掃き清めた斎庭にとびこんで目出度く凱歌をあげ

とあるので１７回の一番福が正しいと考えられる。同じ年の社務日誌にも「先登第一ハ例ノ千足材木店田中太一」とこれまで調べてきた社務日誌の中では、はじめて一番乗りの個人名が出ている。ただ次の年の昭和１４年の大阪朝日新聞阪神版の記事では１８年間のレコードホルダーとの報道があるが、昭和１２年の記事から考えると一番福になったのは１７回で１８回走っていた事も含めてレコードホルダーと呼ばれたのではないだろうか。現在の開門神事とは単純に比較はできないが、昨今の一番福になることの難しさを考えるならば、これはすごい記録である。なぜここまで一番駆けを行おうと思ったのか、この辺りも考察したい。

8、１７回の一番福「田中太一」

この１７回一番福になった彼に、私はとても興味を持った。残念ながら本人に会うことは叶わなかったが、吉井良英氏の紹介でご遺族にお会いすることができ、貴重な話を聞くことができた。この項では彼の生い立ちと彼の開門一番駆けの参加動機、その後の生活について述べていきたい。

写真は西宮神社の門前での田中氏である（昭和１０年代、西宮神社広報資料より）彼は現在の兵庫県多紀郡丹南町の出身で１９００年（明治３３年）に生まれた。西宮市に来たのは、新聞上からでは、１９２１年（大正１０年）と推測されるが、それより前に阪神間に来ていたとのこと。ご遺族の話では

彼はとても信心深かった。毎月初めには伏見稲荷に、２１日には、西宮市の甲山にある甲山大師にお参りに行く「神仏熱心」だった。独立し材木店の経営をはじめた時に従業員にも「神仏は大切にせなあかん」と繰り返していたことや、よその家のお墓にでもお参りをしていた。

とのことであった。この信心深さが最も発揮されたのが西宮神社であった。彼は３６５日欠かさずお参りをした。神社の周りの道は毎朝清掃していたため、戦後建設省近畿局（当時）から表彰されたこともある。

十日戎のこの神事で彼が一番を取り続けていた要因は、この戎様に対するひたむきさだと私は感じた。他の氏子や参詣者たちに、彼の信心深さが認められていたからこそ「一番福」だったのではないか。もちろん体つきも、小回りが利く体型だったらしく、俊足であったとのことであるが。

はじめて新聞紙上に現れた一番福の田中氏は、開門の早駆けを引退をした戦中戦後を挟んでも戎に対する思いは変わらず、家が西宮市外にあった時にでも毎朝西宮神社にお参りをし、１月１０日の早朝参詣にも毎年参加していた。

その他に西宮菊花協会ができるきっかけを作ったり、氏子青年会組織である「若戎会」などの立ち上げにも関わり、西宮神社そして氏子地域の功労者となった。神社の南門の辺りには八重桜を自分一人の力で植え現在では数本が根付き毎年４月には見事な花を咲かせている。

彼は１９９１年（平成３年）に亡くなられたが、本人は晩年「この長寿は戎様の御利益」であると話していたとのことである。

ここから考えられることは、彼が参拝に参加しだしたころ、西宮の社会の変化が著しかったということである。新暦の十日戎の規模が旧暦のそれを逆転させてしまったこと、新しい祭だからこそ狭義での氏子でない田中氏が一番福になれる可能性が出たのではないか。この点についてもこれまでの仮説と併せて最後にまとめることとする。

9、日中戦争中の十日戎

一番福の１７回の田中太一氏が、昭和１３年（１９３８年）に丹波地方から来た尾松氏との同時一番福と判定されてから、一番参りに関して信心という事項以外の「足の速さ」という側面がより重要となってきたことが考えられる。その後の報道では、足の速さに関する記事が多くなる。それと同時に戦争の影が付きまとう。そのことを昭和１４年、

１５年の新聞資料と社務日誌の両面からたどり、どのような変遷をたどったのかを確認したい。

まず、昭和１４年１月１１日の大阪朝日新聞阪神版の記事である。

“今年は誰か”と街の興味を集めてゐた戎さんの一番乗りは過去１８年間のレコードホルダー西宮市久保町千足材木店の番頭田中太一さん（３９歳）がつひに王座を譲って友僚の同市石在町７１田口商店員多司馬玖一（２５歳）に凱歌があがり、二番乗りは玖一君の実兄千足材木店員園之助君（２９歳）で田中さんは惜しくも三位になった、田中さんは数日前から不快で出場が気遣はれていたが颯爽たる青年団服を着て知人の前記多司馬兄弟を介添役にして出場、午前１時頃から大門前にひしめきあふ人の群に加わって待つうち午前６時、内側から消防組２，３０人が太鼓の音を合図にサツと重い扉をあけると忽ちワーツと喚声をあげて決河の勢ひで突撃だ、スタートダツシユ物凄く韋駄天走りの十数名のうちさすがは田中さんだ、トツプを切って進んだが、二町あまりの境内を走るうちやや疲労の態、これを見た親友多司馬君兄弟“覇権を他に渡してなるものか”とラスト・ヘビーをかけ、つひに最初の鈴を摑んで凱歌をあげ一番乗りの玖一君はご褒美の大鏡餅をいただいた。「田中さんが病気で身体が衰弱してゐるといふので手助けにでたまでですが田中さんが危なくなったのでやむを得ずみんなを出し抜いたわけです、決して田中さんのレコードを打ち破るつもりでは毛頭ありません」と交々語る多司馬君兄弟はいづれも用海小学校時代ランニングの選手で鳴らした健脚家、一番乗りの弟玖一君は同市石在町田口樽丸商店に勤め、二番のりの兄園之助君は田中さんと同じ千足材木店に勤める真面目な青年、園之助君はすぐる上海事変に出動した工兵上等兵で現在在郷軍西宮中央分会の役員をしてゐる、病後の疲労から１９年目にをしくも覇権を逃した田中さんは「病気のあとで身体が弱ってゐたので一番乗りは難しいと思ってゐました、せつかく私が永年持ちつゞけてきた一番乗りをせめては仲間のものに譲りたいと平素昵懇にしてゐる多司馬兄弟に出て貰ったわけで仲間のものが一番乗り出来てこんなに結構なことはありません」と満足げに語った

そして１５年の１月１１日の同新聞の記事である。

“今年の一番福は誰に”と話題になってゐた西宮の十日戎の一番参りはつひに昨年の覇者西宮市石在町７０田口樽丸商店店員多司馬玖一君（２６歳）が連続覇権を握ったがその殊勲の裏に戦線から弟を励ます兄勇士の熱烈な真情と先輩の深い友情が秘められてゐる、（中略）園之助氏は昨年８月名誉の召集を受けて中支戦線に出征、上等兵として活躍してゐるが戦線にあっても常に十日戎一番乗りのことを気にかけ先月十日占領した敵陣地の前で戦友達と一しよに撮影した写真に添へて“輝かしい興亜新春の一番乗りはきつとお前ががんばつてくれ”との手紙を航空便で送ってきた、しかもその激励の軍信を玖一君はあたかも宵祭の九日手にして“兄が敵陣を占領したあの気持でかならずやらう”とかたく決意した、この軍国兄弟の気持ちに感激したのが十八年間連覇のレコードを持つ同市久保町千足材木店の番頭で園之助上等兵と昵懇な友人田中太一氏（４０歳）で玖一君の介添役として出場することになりこの朝４時ランニングシヤツに日の丸の鉢巻を締めた玖一君は兄勇士の手紙と写真をしつかと内壊に秘めて６時の開門と同時に決勝の意気物凄くサツと飛び込んだ、最初のダツシユは数人が団子になって暁闇の中を走つたが南宮神社附近から早くも玖一君はトツプを切つた後から“多司馬君頑張れ”と声援を続けるのは田中氏だ、つひに多司馬君は目出度く凱歌をあげた、本殿の鈴縄にすがりついた玖一君は“兄さんやりましたよ”と思はず感激の叫びをあげ、吉井宮司から高々と一番名乗りを受け晴れのご褒美として御供米や、お箸と兄勇士のお守札をいただいた“今年はたいそう寒かつたが戦線の兄のことを思へばなんの寒いくらゐと一生懸命でした、早速お守りと一緒にこのことをいつて兄を安心させたいと思ひます”

このあと、戦時状況の悪化に伴う紙面の縮小とともに小さくなっていくものの、昭和２０年まで開門の記事はおおむね存在する。しかし大阪朝日新聞において特に大きく報道されているのは特にこの１４年、１５年にかけてである。この背景には昭和１４年、１５年当時、川西航空機などの工場もあり、西宮が阪神工業地帯の中心地として産業発展したことや、当時の日本が経済的にそれまでよりも、余裕がある時代だったこともあるだろう。そしてなにより、昭和１２年７月から本格化した日中戦争は大きな意味を持つ。

これまでより膨大な量の記事が、新聞の中で割かれている。これまでの十日戎が持っていた「個人的な福を得る」という側面とともに速さの部分が強調されている。そして最も気づく点は戦時高揚としての意味合いが付加されていることである。以前の「一番福」とは異なった様相である。なぜこのような変容を遂げたのか、もしくは遂げることができたのかこの神事の持つ特徴も考察で述べてみたい。

１０、おわりに

本報告では主に社務日誌、新聞資料、およびインタビューから明治後期から昭和１５年までの歴史を追ってみた。証明されたこととしては「交通機関（特に阪神電鉄）の発達によって、西宮の郊外化・都市化は達成されたということ。それにより新暦によって生活する参詣者が多く集うこととなり、新暦の十日戎が西宮でも主祭化した」ことである。つまり、現在行われている十日戎は古来の祭ではなく、新暦による新しいイベントである。この最後の項では、考察として「なぜ新暦で行われる新しいイベントに多くの参拝者が集うこととなったのか」、「新暦の十日戎の中で門の注目度が高まることとなったのか」そして「なぜこの一番

詣りに、多くの意味が付け加えられたのか、もしくは付け加えることができたのか」について考察したい。

この祭の特徴として、旧暦の十日戎を考えてみても、江戸期からの変遷の中で氏子組織にあまり縛られることがなかったことが挙げられる。「福」という概念が個人の現世利益に特化したものであり、旧暦・新暦の区別なくイベントの移入が可能だったこと、そのため旧暦の祭で参詣者が持っていた一番参りの考え方までもが新暦の祭で生かされることとなった。

明治となり様々な地域の移住者が増え、都市化していく中で氏子地域全体での「居籠」が不可能となったが、その過程で門の果たす役割が確立してきたのだと考える。つまり、これまで町全体が行ってきた「ミカリ」の代わりとして聖と俗を隔てる装置、非日常の空間を作り出す装置として門自体が機能を始めたのではないか。明治４１年の記事では「午前１時の開門と共に我第一の福を授からんと押し掛くる」とあるが深夜に押し掛ける、もしくは早朝に駆ける非日常性こそ柳田氏の説く「神人和合」の境地である。

社会が変容し、新暦での十日戎という本来とは別のイベントとなっても本来の祭事が持つ部分を保持し得からこそ、十日戎は祭事としての意味を持ちながらの発展ができた。その中で特徴的な部分である「開門」という行事が独立してきたのではないか。

開門という部分に焦点があたることで信心深かった田中氏が「一番福」として登場することとなり、イベントとしての容易さから開門早駆けの参詣者が増えることに繋がったのではないだろうか。本来ならば居籠＝ミカリは氏子だけが行うものであり、外来者は立ち入ることのできない祭である。しかし江戸・明治と歴史の変遷を経ることで、祭に参加する自由度が増してきたことが祭自体の規模を発展させることができた。しかしながら、本来の持つ意味合いは門の存在によって保持されたということがある。

当時の開門一番駆けの様子、そして走った時の印象を是非とも田中氏に聞きたかったがそれは叶わない。しかし新聞取材の中での「欲からではない、達者でお参りできるだけで嬉しい、福は主人に持つて帰るのです、一番に参拝しないとどうも気分がわるくて」(昭和１２年１月１１日大阪朝日新聞）という言葉がすべてを表している。彼を一番駆けに走らせたものは、自己の現世利益ではない「何か」だったのではないか。彼のその後の生き方を考えたとき、この思いが強くなる。

そしてこの新暦の十日戎の持つ性格から、時代の流れに影響されやすかったと考えられる。日中戦争の本格化によって十日戎を取り上げる新聞の論調は戦時色が強くなり、一番福もその様に報道された。開門を待つ人の中には「殊にその中に交じって父を、夫を戦線に送ってゐる若い婦人が武運長久を祈願する真剣な姿が多く見受けられここにも力強い興亜風景を描いた」(昭和１５年１月１１日大阪朝日新聞阪神版）とある。「福」という概念だったからこそ生まれ得た光景である。そのような様々なものを内包しながら人びとの現世利益に十日戎は機能していき、そして本来の「物忌」としての祭礼部分は継続していった。

古来より行われていた「御狩神事」から室町期の戎神の信仰形態の変化を経て、明治に至り開催時期や神事自体の形態を変えることとなった十日戎だが、元来の祭が持っていた機能は「開門早駆け行事」で残ったと私は主張する。

これらのことから、近現代までの変容にて生まれたこの祭の社会における意味は「福」という現世利益をかなえる場の提供と本来持っていた「神人和合」の境地に至ることのできる機会の提供という２つであったと結論付ける。

このあと日本は太平洋戦争に突入する。これからの課題として、明治・大正期の資料の更なる収集と太平洋戦争期から現在至る史料・資料の収集そして読み込みを行い、本報告以降の当神事の変容についてもう少し詳細にたどっていきたい。特に現在使われている「開門神事」や「福男」の語句がいつから生まれたのか、「早駆け」のスピードの部分に記事が多くを占める様になった要因などをもう一度、史料をもとに調べ、考察したい。戦時中戦後そしてそれ以降の変遷についても調べていきたい。

考察の中であげた門の持つ役割が現在の神事の中で参加者たちが感じているのか、祭の機能が現在でも継続されているのかについて、アンケートや面接および参与観察の形での調査を引続き行っていくことでこの十日戎の開門神事に関する総合的な理解を行いたい。

参照文献・註

1) 朝日新聞夕刊阪神版、平成２１年１月１０日
2) 吉井良隆『神社史論攻』１９９０、西宮神社
3) 成城大院文学大学学研究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編『えびすのせかい　全国エビス信仰調査報告書』２００３、成城大学
4) 拙原稿では「十日戎開門神事考」米山俊直編『一えびす信仰研究会報告―えびす信仰の謎をめぐって』2001、大手前大学　pp.35～70）その他に「十日戎開門神事再考」米山俊直編『文明・宗教・民間信仰―民間信仰共同研究会報告―』2004、民間信仰共同研究会　pp.101～122）がある。
5) 吉井良隆前掲書 p.p.40
6) 柳田国男『定本柳田國男集第１０巻』１９６９、筑摩書房 pp.168
7) 西宮神社編『西宮神社』２００３、学生社 p.p.106
8) 吉井良隆前掲書 p.p.52
9) 吉井良隆前掲書 p.p.53
10) 吉井良隆前掲書 pp.58
11) 吉井良隆前掲書 pp.60
12) 吉井良隆前掲書 pp.61
13) 柳田前掲書 pp.153･314
14) 柳田前掲書 pp.222
15) 柳田前掲書 pp.220
16) 吉井良隆前掲書 pp.61
17) 吉井良隆前掲書 pp.63
18) 吉井良隆前掲書 pp.64
19) 吉井良隆前掲書 pp.67
20) 大阪朝日新聞神戸附録、明治３６年２月７日
21) 「阪神間サミット」実行委員会編『阪神間モダニズム』河出出版社、１９９３年を参考にした。

(2009年10月９日　受理)